

CARGUY SCR Rd.3 Race Report

CARGUY SUPER CAR SERIESは、5シーズン目となる今年も富士スピードウェイを舞台に、2大会・全4戦で開催される。その第2大会が10月6日よりスタートし、予選と第3戦決勝レースを行った。毎週のようにやって来る台風の影響が心配されたものの、当初の予想より進路を北側にずらしたこともあり、直接の影響は受けずに済んでいた。

【予選】

15分間の計測となる予選は、9時50分からのスタートとなった。未明まで降り続いていた雨が路面に残り、全車がウェットタイヤを装着して走行した。徐々に路面状態が向上していくのは明らかなだけに、ほとんどのマシンが計測開始と同時に走行を開始するも、1台だけしばらくピットに残っていたのが SALIH&CHARLIE HURACANだ。サーリ・ヨルチュとチャーリー・イストウッドは、ともにWECを戦うドライバー。1週間後に控えたレースの肩慣らしとしての参戦となった。

最初に1分55秒台に乗せてトップに立ったのは、CARGUY RUF 488CH の木村武史。前大会まではウラカンでの参戦だったが、「今までフェラーリ488に乗ったことなかったし、ウラカンは増えてきたので新しいチャレンジです」と木村。練習もそこそこに乗りこなしてきたのは、さすが今年のチャンピオンだ。そのままタイムを連続で短縮するも、「内圧を1、2周目に合わせ、1周目にいいタイムが出て、2周目に53秒台に入れる予定がちょっとオーバーランしてしまって。それでも54秒台が出たのは良かったんですが、もう内圧が上がりすぎて厳しくなっていました。正直言って、予想していた以上に私の488チャレンジとウラカン勢の性能差があったので、まあまあ頑張ったかな」と木村。結局、1分54秒832を記すに留まり、5番手という結果に終わる。

そんな木村の苦戦とは裏腹に、中盤からトップに立ってタイムを刻み続けていたのが、恒志堂レーシングSLS GT3の平中克幸だった。ラスト2周のアタックで1分53秒281を記録して、ポールポジションを獲得する。しかし、「今年からタイヤが（ピレリに）変わったのと、セットの方向性も定まっていなかったんで、ちょっと不安が残っています。決勝はドライブでしょうが、昨日の練習の感じではドライブでもバランスは悪かったので……」と悔しそうに平中は語る。だが、パートナーの佐藤元春は前向きに「一番タイムを出せたからには、決勝に向けてセッティングを直して、いいレースをできるように頑張りたいと思います」と語っていた。



RUF

PIRELLI

CARGUY
SUPER CAR RACE

Moty's
SUPER LUBRICANT TECHNOLOGY

2番手は近藤保が1分53秒353を記し、山崎裕介とともに駆るSAccess HURACAN GT3が獲得し、残り5分からのアタックを成功させ、1分53秒998をマークしたイーストウッドのSALIH&CHARLIE HURACANが3番手を獲得。また、前大会に続いてIIIクラスで孤軍奮闘のBRP★Audi RS3 LMSを駆る須田力は、2分4秒764を出して総合7番手につけた。今回のパートナーはBRPの代表でもある、奥村浩一が務めることになった。

【決勝】

予選終了から5時間あまり。15時に50分間で争われる、第3戦決勝のスタートが切られた。最終コーナーの向こうには青空が広がるのに、小雨舞う微妙なコンディションの中、グリーンシグナルの点灯と同時に猛ダッシュを見せたのが、SALIH&CHARLIE HURACAN のヨルチュ、そしてCARGUY RUF 488CHの木村だった。ポールポジションからスタートした恒志堂レーシングSLS GT3の佐藤を、1コーナーの進入でパスしてヨルチュはトップに浮上。佐藤は木村にもオープニングラップのうちにかわされ、3番手に後退してしまう。ただ、小雨は間もなくやんで、路面を濡らすまでには至らなかった。

1周目を終えた時点でのヨルチュと木村の差は約1秒で、木村と佐藤の差は約2秒。これがしばらくの間は、それぞれ広がり続けていたのだが、5周目を過ぎたあたりから、木村と佐藤のタイムが逆転するようになる。じわりじわりと近づいていった佐藤は、9周目にはテール・トゥ・ノーズ状態とし、ヘアピンから300Rにかけて並走するも、ここでの逆転は許されず。しかし、なおも追撃の手を緩めなかった佐藤は、11周目の1コーナーで木村を抜き、恒志堂レーシングSLS GT3は2番手に浮上する。



そしてスタートから20分経過したところで、ピットロードオープンとなった。ここから10分間でピットに入らなければペナルティの対象となる。上位陣で最も早く入って来たのは SAccess HURACAN GT3で、12周目に近藤から山崎にバトンタッチ。今回はジェントルマンの有無、マシンの戦闘力を考慮し、それぞれにピット停止時間が定められていたが、SAccess HURACAN GT3は77秒。次の周に入った恒志堂レーシングSLS GT3は68秒。それまで築いていたギャップもあって、佐藤からステアリングを託された平中は、山崎の前でコースに復帰。



RUF

PIRELLI

CAR GUY
SUPER CAR RACE

Moty's
HYPER LUBRICANT TECHNOLOGY

そしてトップを走行していた SALIH&CHARLIE HURACANと、CARGUY RUF 488CHは、同じ15周目にピットイン。それまで20秒近く離されていたとはいえ、義務づけられたピット停止時間はそれぞれ68秒と45秒とあって、一気に差が縮まることが予想されていたのだが……。CARGUY RUF 488CHはドライバー交代を行わずに済むメリットを生かし、ここでタイヤを4本とも交換して勝負に出たが、なかなかピットを離れられなかった。1分近くロスして、木村は4番手でコースに復帰する羽目に。

それとほぼタイミングを同じくして、なんと恒志堂レーシングの平中が1分40秒983と、他を圧するファステストラップを叩き出す。その段階でトップとの差は20秒近くあったが、残り時間を20分以上残すことから、「ひよっとしたら、ひよっとするかも」と思わせた。ところが次の周、平中は突然スロウダウン。ミッショントラブルに見舞われてしまったのだ。これでピットに戻らざるを得ず、無念のリタイヤを喫してしまう。「追いつけない差じゃなかったから、しっかり直してもらって、次のレースでこの悔しさを晴らします」と平中。

これにより、SAccess HURACAN GT3の山崎とCARGUY RUF 488CHの木村がひとつずつ順位を上げて2番手、3番となるが、トップを行くSALIH&CHARLIE HURACANのイーストウッドは微動たりもせず。すでに57秒としていたマージンを、最終的に1分21秒差とする圧勝となった。「とにかくすごいレースでした。日本で最初のレースから、こんな結果が出て良かった。クルマのセットも良かったし、ふたりともコンスタントに走れたのが良かったんだろうね」とイーストウッド。

2位はSAccess HURACAN GT3で、追いかけるはずだったCARGUY RUF 488CHは、木村ひとりで50分の走行で最後は軽い脱水症状となっており、本領を發揮できぬままの幕切れとなっていた。「タイヤ交換をしたら、メカが違うナットをつけちゃって、つけ直して1分ぐらいロスしちゃって。それがなければ勝っていたかもしれません。でも、スタートでかましたので、見せ場を作れたと思いますし、明日もあるんで」と木村。

一方、2位でゴールの近藤は、「今日はライバルの恒志堂レーシングがいたから、頑張ったんだけど、頑張りすぎちゃって。実は誰も気がつかなかったでしょうけど、スピン2回もして。本当に悔しいんですが、山崎さんのおかげで何とか2位。ありがとう」と語っていた。前大会で2連勝のシュウ・ウェイがエントリーを直前になって取り消したこともあり、2戦連続で表彰台に立った近藤がポイントリーダーに浮上。パートナーの山崎が6ポイント差で追うも逆転の可能性はないため、9ポイント差で続く木村にだけ、逆転の権利が残されることとなった。

またIIIクラスのBRP★Audi RS3 LMSは、ひとつ順位を上げて総合6位でフィニッシュ。「お客さんを乗せて、僕はS耐の練習を兼ねた参戦なので、いい練習させてもらえました。しかもJAF戦でこんなに、しっかり本番環境で走らせてくれるレースは他にないので、すごくいい感じです」と奥村は語っていた。

なお、今回の結果に基づき、上位3チームは1位から順に15秒、10秒、5秒が次のレースのピット停止時間に加算される。これがどんな影響をもたらすのか、大いに気になることである。その決勝レース第4戦は、10月7日（日）の10時5分より40分間で競われる。

